

いじろのとも

第六卷

五月号

物質畏敬の教え

生命の畏敬は

いのちあるものを

尊ばなければ

ならないことを

教える

でも

いまもつと

大切にしなければ

ならないもの

それは物質

いまや

物質畏敬の教え

が

滅びる

人心が滅びる

農業が滅びる

自然が滅びる

いま

人間の心が

自分自身の

経済原則だけで

利害関係だけで

情緒欲望だけで

動いているから

人生を考え直して

みたい人は（十七）

『老子』解説（十六）

今月号は第七十章を取り上げます。

（第七十章）私の言葉は、とても理解しやすく、とても行い易いものです。なのに、世の中には理解できる人がなく、実行できる人もありません。

言葉には、中心となるべき根本があり、行い・行事には、それを成り立たせている元があります。なのに、それを知らないから、私分からないのです。

私を分かる人は、めったにいませんので、私に則（のつと）る人は、貴いと言えます。

聖人は、見かけはボロをまもっています、心の内には玉を宿しているのです。

例の、老子研究に大きな業績を残した武内義雄の『老子之研究』によりますと、これが、ほんとうに老子の言葉なのかどうか分からないそうですが、読んでみて日頃

の私の気持ちに合う部分がありますので、取り上げることにしました。

実は、この偈を読んですぐに、「釈尊のことば（法句経）」を思い出しました。それは、昨年の本誌六月号の次の二つの偈です。

（九二）財を蓄えることなく、食物についてその本性を知り、その人々の解脱の境地は空にして無相であるならば、かれの行く路（＝足跡）は知り難い。空飛ぶ鳥の跡の知りがたいように。

（九三）その人の汚れは消え失せ食物をむさばらず、その人の解脱の境地は空にして無相であるならば、かれらの足跡は知り難い。空飛ぶ鳥の跡の知り難いように。

この偈には、たいして難しい言葉はありません。一般になじみのないのは、空と無相だけです。これらは、昨年六月号の解説にも書きましたように、解脱の境地を表す言葉で、空はこの世の存在が全て空であると感じることができ、空は空であり、無相は存在には差別がないと感じることができ、ということであることをそれぞれ意味しています。

もう一つ、この偈で思い出しますのは、ソクラテスと

キリストのことです。どんなことかと言いますと、二人とも、老子が言うように、自分をちゃんと理解する弟子がいなかったということです。有名な弟子としては、ソクラテスにとつてはプラトンが、キリストにとつてはペテロや（直接の弟子ではありませんでしたが、キリストの死後回心し、ペテロと共に今のキリスト教の確立に大きな役割を果たした）パウロなどがあつたわけですが、私から見ますと、これらの弟子は師匠を正確、適切に理解していなかったように思えるのです。プラトンについては、以前、このことを書いたことがあります。キリストについてはこの『老子』の解説が終わってから、いつか書くときがあると思います。

以上あげましたことは、いずれもここで取り上げています。老子の言葉と同じことを意味しています。それは、道を体得した人（老子）、解脱した人（釈尊）、神と一体となることを体験した人（ソクラテス）、ここに宿している神を実感した人（キリスト）、のいずれをも理解することは、とても難しいということです。

さて、結論を先に言つたようですが、あらためて本題に戻つて、老子の言葉を検討して行きたいと思ひます。

まず、出だしの「私の言葉は、とても理解しやすく、とても行い易いものです。なのに、世の中には理解でき

る人がなく、実行できる人もありません。」という部分ですが、この章全体で言いたいことを、ここで言つていようと思ひます。具体的に老子に即して言ひますと、「私の言葉」とはこれまで既に解説して来ましたが、「道の体得」であり、「無為自然の境地」なのです。また、「実行すべきこと」は、「意識（こころ、からだ、あたま）」を「静める」べく修行に励むことです。

これまでの、私の老子解説を読まれた方なら、その解説のおおかたの部分、つまり老子のおおかたの部分は言葉としては、ご理解いただけたかと思ひます。ただ、老子の心の中の体験内容（自内証）を言つている部分は、言葉としては、ご理解いただけたかもしれませんが、老子の言うことを、ただ信じるだけだつたところが多かつたのではないかと思ひます。

私がおもひますには、言葉はやさしくても、自分の体験のないことは、人間にはほんとうは分からないものだ、ということ。 「あたま」で分かつたとしても、人間の精神全体では分かつたとは言えないのです。ですから、法句経にありますように、「空飛ぶ鳥の跡の知り難いように」、老子の眞実の心は知り難いのです。その証拠に、私がこれまで入手した三十冊近い老子の解説書のどれを見ても、老子の境地や行いを適切に理解できている本は

ありません。

でも、たとえ言葉としてだけの理解でも、それが動機付けとなつて、私がこれまで解説して来ましたように、老子の言うことを信じ、行うべきことを行えば、やがて老子の言うことが、いや人間の在り方についての、あらゆる人の言うことが、自分の「全精神」で理解できるようになるのです。

言葉はやさしくても、それを精神全体で「理解する」のは難しいのですが、しかし、「行う」べきことはとても易いことなのです。それは、ただ、ひたすら毎日々々ヨーガ（瞑想）をすることなのです。テレビや新聞を読む暇があれば、その時間をヨーガに費やせば、誰でもが一日に一時間やそこらは、ヨーガをすることができると思います。それは、とてもやさしいことです。ヨーガのデモストレーション体操を見て、自分にはできそうもないことだと思っている人があるかも知れませんが、そんなことはありません。八十歳の人でも勿論できます。例えば、背筋を伸ばし、正坐して、じっと心を落ちつけ、心を静めているのもヨーガです。般若心経のようなお経や、お題目・名号や、真言などを一日一時間唱えるのも、ヨーガです。こうしたことは、老子が言いますように、とても易いことですが、私の体験する限り、この簡単

なことすら、「毎日、ひたすら」続ける人は、めったにいません。

老子の時代からそうなのかもしれませんが、多くの人は、知的に進んだ現代人は特に、自分が「あたま」で理解すれば、それ以上のことはないように思っています。それでいいと思つているのです。誰でもできるようなことを「毎日、ひたすら」行う必要などない、と思つているのです。そして、自分では正しいことをしていると思つて、間違つたことをしているのです。たとえば、たばこを吸う人がしていますように、「業（害）」を自分だけではなくて、周囲の人にも積んでいるのに、そのことにさえ気付けないのです（ただし、たばこの害には、今は気付いている人が多いとは思いますが）。そして、こうした間違いを、悲しいかな、生き方を求めるべき僧侶や教師だけではなく、あらゆる職業の人が犯しています。その業は社会全体として、どんどん増えていつているように見えます。ますます、多くの人が、自己への執着で、空しく風化し、擦り切れている言葉を弄して、言い逃れさえできればいいかのように、平然と悪をなすようになっていくのです。

人生を生きていく上で、いわゆる理性的に「あたま」で分かることと、その分かったことを「からだ」や「こ

ころ」で実行することとは別のことなのに、そのことに
気付けないのです。議論をしたり、多くの人が寄って
いる考えれば間違いない行動ができると思っ
ているのです。人間は、いろいろな分野でノーベル賞をもら
ったような人でも、あるいは、経済的、政治的に立身出世
した人でも、あるいは、すばらしい芸術を造りだせた人
でも、あたまで考えて間違いない行動できるものではな
いのです。そのことが、よく分かるならば、つまり、自
分だけではなくて他者にも悪をなしていることに気付く
ならば、それを克服する道、老子の言う「行行」ことを
求める素地ができるのです。

それは、あたまではなく、からだやこころを制御する
ために、何をなすべきかを自分でいろいろ試してみるこ
となのです。そうするところには、老子や釈尊やキリ
ストの説く「行い」をなすことはできないのです。

本章の次の段落は、「言葉には、中心となるべき根本
があり、行い・行事には、それを成り立たせている元が
あります。なのに、それを知らないから、私に分からな
いのです。」という部分ですが、しかし、この部分は、
これまでの解説でお分かり頂けると思いますので、解説
は省略し、さらに次の段落に進みます。

それは、「私を分かる人は、めったにいませんので、

私に則る人は、貴いと言えます。」という部分です。

前にも述べましたように、老子を精神全体で理解する
ことは、その人自身が解脱していない限り不可能だ、と
いうことでした。ということは、老子を理解できる人は
めったにいないことになります。できることは、真に理
解できなくても老子を信じて、老子の言う通りにしよう
と努力することなのです。それを、老子は「則る」とい
う言葉で表現するのです。それは、私の理論でいえば、
他己の働きになります。いま、科学と技術の発達に伴い
世界中で、自己が肥大化し、他己の働きが弱まっていま
す。いまこそ、釈尊、老子、ソクラテス、キリストの四
聖の教えを信じ、それに則るべきときだと言えるのです。

最後の段落は「聖人は、見かけはボロをまといま
すが、心の内には玉を宿しているのです。」という部分
ですが、聖人は世間を超えていますから、ボロを着てい
ても気になりません。しかし、それは普通の人の理解で
きないことです。さらに、心の中には、丸く、自ら光を
放つ玉を宿しているのです。それは、私の理論で言いま
すと、無意識の「生命蔵識」と「如来蔵識」とが統合さ
れた状態だと言えます。それは、自分の意識の及ばない、
ひたすらな、老子を信じて行い修行でしか至ることので
きない境地なのです。

自作詩短歌等選

解脱に至っていない

自分が

解脱に至っていないのに

解脱に至ったと

思うことほど

傲慢なことはない

仏教は

厳にそれを戒めている

キリスト教では

それを認めもしない

でも

現代人は

將軍のように

王さまのように

征服者のように

自己を

肥満化させ

自己を

絶対化させ

そして

愛情欠乏症に

陥っている

やさしい人間

やさしいところを

持って

きびしく

言うのはよいが

冷たいところを

持って

やさしく言っても

だめ

自分を棚上げ

己が住む

社会を批判

する人の

多くは自分

棚にあげける

増える社会の業

世の中は

多くの人が

自らの

エゴの主張を

するほどに

業の総体

増えて行きけり

こどもとおとな

こどもは

自己中心のでも

執らわれのところ

がない

おとなは

自己中心ではなくても

執らわれのところ

がある

己の育っていない

おとなは

自己中心の

執らわれがある

助け合いとは

もらうことを

助け合いとは

考えないで
ただあげること

愛をあげることに

その結果として

助け「合い」が

起こる

自作随筆選

女性の自己確立

ある有名な若手の家族社会学者は、「女性の幸せが何なのかを自分で知っておくことが大切だ。どうすれば幸せかを知っておく。子どもや家族は、手伝いはしてくれませんが、そのものではない。」と言います。

この言葉を聞いていて、私は、女性の自己確立をはかろうとする姿勢と自己の肥大があるように思えました。

女性が自己を確立するということは、家庭から女性が独立することでもあると思うのです。ということは、今や、女性にとって家庭は、単に、自分が愛情を注ぐ対象ではなく、自分も愛情をもらう対象になっていることを

意味していると思うのです。つまり、女性にとって家庭は、子どもや夫から愛情をもらう場なのです。

そうなりますと、家庭は、構成員の皆が愛情を欲しがる場になってしまいます。人間は、お互いが集団の中の成員に愛情を与え合うとき、その集団は凝集性を高めまします。家庭ですと、たとえ小さな核家族ではあっても、崩壊家庭になることはありません。

でも、この家族社会学者の言うように、女性が家庭から独立して、お互いが愛情を求めあいますと、家庭は、常に、崩壊の危機に直面せざるを得ないのです。

女性が社会に進出することに反対するわけではありませんが、最後の砦であった女性も、一般社会の趨勢に乗って自己を主張しはじめた現代は、ますます社会全体が崩壊する方向に進んでいることを、あらゆる人が気付かなければならないことを言っているだけなのです。

読者のヒーロニケーション

俳句

蟻の道葉蔭につづき雨やまず

実の入らず落つればただのさくらんぼ

老鷺の瀬音まじりに日の暮れて

ふんわりと初夏の風峠越す

釈尊のごとば（三三五）

法句経解説

第一〇章 暴力

（一二九）すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身をひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。

（一三〇）すべての者は暴力におびえる。すべての（生きもの）にとつて生命は愛（いと）しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。

二つの偈は、それほど難しいことを言っているわけではありません。仏教の、いわゆる「不殺生戒」を言っているだけです。でも、私なりに少し敷衍（ふえん）しておきたいと思えます。

人間は解脱に至らない限り、つまり、無意識の中の、「生命蔵識」と「如来蔵識」との統合がとれない限り、成長に伴って生命蔵識（煩惱蔵識）の働きが優勢になり、自分が生きて行きたいという欲望に自分が支配されることになって行きます。

ところが、解脱に至る人はめったにいないわけですから、この偈に言う通り、すべての人は、自分の生命がこよなく愛しいのだと言えます。この世には生命より大切なものはないということになって来ます。ですから、生きる可能性の増大と死の可能性の減少とは、あらゆる人の生きる目標になっても不思議ではないのです。

生きる可能性の増大とは、自分の欲望（食欲、性欲、優越欲）や情緒の限りない満足であり、死の可能性の減少とは、他者も自分と同様な生きる可能性の増大を主張しようとすることから受ける、外界からの自分への制限（攻撃や脅威）の排除であるわけです。

つまり、食欲（物欲・金銭欲）経済欲を満足させ、性欲（子孫繁栄欲）を満足させ、優越欲（権力欲）政治欲を満足させることが、自分の生存（生き残り・サバイバル）の可能性を増大させることになり、それを邪魔する力に対して攻撃を加えることが、死の可能性の減少になるわけです。

特に、優越欲の満足と邪魔と考える者への攻撃は、即ち、他者そのものの否定につながっていきます。極端になりますと、自分の、ひいては自分の属する集団の支配に服従する者のみが、生き残りを許され、自分や自分の集団に服従しない、あるいは反抗する、あるいは攻撃すると

いった、自分にとって何らかの脅威を及ぼすような者はすべて、暴力で排除し、抹殺することになって行くのです。その例は歴史上、数限りなく存在しています。

しかし、そうしたことで、人の、もつと言えば、人類の真の幸せは来ません。こここの偈にありますように、自分の優越欲をはじめとする諸欲求の追求や他者への攻撃は、己がされて困ることとして、無制限になしてはならないことなのです。孔子も「己の欲せざる所を、人に施すなかれ」と言っていますし、哲学者のカントも有名な「定言命法」と呼ばれる言葉で、同様のことを言っています。勿論、キリスト教でも同様のことが説かれています。しかし、もつと敷衍して言えば、このように私たちはお互いが否定し合う関係にあるだけではなく、同時に、矛盾的ですが、お互いが支え合う関係にもあるのです。自己を肥大させ、絶対化して、自分に都合の悪い他者を否定（武力や暴力によって、不殺生戒を犯す）すれば、それは結局、自分自身を否定することになっていくのです。つまり、自己が絶対化すればするほど、自己を外界に定位することができなくなって、自ら（の身や集団）が崩壊の危機に陥って行くのです。平和にとつてとても危険なのですが、このように自己を絶対化する宗教は、これまでに、否、いまま、方々に存在しています。

私たち人間は、解脱に至ったときだけ自己を絶対化することができるのですが、しかし、その時は如来さまという絶対な他者に定位し、係留していますから、他者を否定するのではなく、自分を棄てて、他者を助ける存在となることができます。

しかし、横道にそれますが、困ったことになかなか自分が解脱したのかどうか、自分では判断できません。ですから、ヨーガではグルと呼ばれる師の指導で、自分を判定してもらうわけです。これは、ヨーガだけではなく、その流れをくむ真言密教や禅宗でも基本的には同様で、師から解脱に至ったと認定してもらうのですが、今や仏教では師そのものが、解脱していると思える人がほとんどなく、認定の儀式は形骸化しています。

解脱していないのに解脱したと、勝手に自分が判断しますと、それは相対的な自己を絶対化することになるわけですから、とても危険なことなのです。いくらでも過ちを犯してしまいます。極端に言いますと、自分は絶対なのですから、自分を理解しない未解脱者は悪をなしているとして、悪をなさせないように殺したり、暴力をふるうことすらが許されることになります。それが、その人を救うことだと殺生や暴力を正当化する論理すら生まれてくるのです。

(一三一) 生きとし生ける者は、幸せをもとめている。もしも暴力によって生きものを害するならば、その人は自分の幸せをもとめていても、死後には幸せが得られない。

(一三二) 生きとし生ける者は、幸せをもとめている。もしも暴力によって生きものを害しないならば、その人は自分の幸せをもとめているが、死後には幸せが得られる。

この二つの偈も、対をなしています。それは、生きものを害すれば、死後には幸せがなく、生きものを害さなければ、死後には幸せが得られる、ということ。これらは、輪廻転生を教えるものです。

輪廻転生につきましては、先々の三月号で取り上げました。(一二六)です。もう一度確認して頂きたいと思います。

そのときも書きましたが、輪廻について言うのは、現世をより善く生きるための方便であり、また、将来に渡って、人類が全体として幸せになっていくための方便だ、と私は思うのです。釈尊は、死後、自分がどこに生まれ変わるかなぞ、本気で気にされていたわけではありませ

ん。どこまでも、衆生を救うための方便なのです。

ところで、この偈の教えは、「生きとし生ける者は、幸せをもとめている。だから、自分も幸せになりたいのなら、暴力で害してはならない。」ということなのです。私は、現在は、さらにこの偈を敷衍(ふえん)、拡張して、自分が、否、人類が幸せになるためには、精神(人)や生命だけではなく物質をも含めて、この世のあらゆる存在者(物質、生命、精神)を、尊重しなければならぬ、と思うのです。

いま、世界中で人類だけが繁栄して人口が増え、様々な生き物が絶滅の危機に瀕しています。瀕していない種でも、絶滅をおそれ、「感傷的」に保護が訴えられたりしていますが、私は、そんなことで人間を含めて生命が維持されるとは思えません。

いま、人類の幸せや生命の存続にとって一番危険なのは、人間が、生命を粗末にすることではなくて、物質(自然)を人類だけの生活に都合のいいように「人間の自由」で、「いじくりまわす」ことであり、さらには、あらゆる物質を「湯水のごとく浪費する」ことだと思うのです。

それは、例えば、爆弾であろうが、発電であろうが、原子を操作することであり、さまざまな化学物質を操作す

ることであり、遺伝子を操作することであり、まだ使える物を無駄に処分することであり、質素節約を忘れて贅沢三昧な生活に陥ることだ、と言えます。

こうした物質軽視の弊害は、現在でも、この地球環境の悪化として、直接的に現れています。それは、森林が大規模に伐採され、焼き払われ、枯れていくことであり、大気圏オゾン層が破壊されることであり、大気が汚染されることであり、地球が温暖化することであり、地球規模で大地が砂漠化することであり、核で地球が汚染されることである、と言えます。

今後もしこうした傾向は続くでしょうが、新たな危険も予測されます。その中で最も大きなものは、核の管理の問題です。

現在、核兵器は拡散しない努力がなされていますが、人間の考え方が変わらないかぎり、とても出来る相談ではないと思えます。

例えば、アメリカは最も多く核兵器を持っていますが、そのことを悪いことだと反省している風はありません。それは、先日のアメリカ大統領の、日本への原子爆弾投下の正当化発言を見れば明らかです。自分は悪いことをしたと思ひもしないのに、よその国が、例えばイランや北朝鮮が原爆を作る可能性があるとして、経済的・政治

的に圧力をかけ、経済封鎖を日本にも持ちかけています。それは、全くのエゴ、自己絶対化以外の何者でもありません。そんなことをしても、作る意志さえあれば、原爆の製法が文化的「遺産」として残っているわけですから、いつかは必ず作るでしょう。また、ロシアは核兵器の密輸さえしなません。

大切なのは、世界中の人たちが、核を持ったことも、使ったことも罪悪であつたと「悔い改める」ことが必要なのです。釈尊が言われますように、あの世でふ幸せにならないように、反省することが大切なのです。そして、今後も使わないと人類全体が誓い合うことが大切なのです。いまは、核を例にあげていますが、これは、なにも核だけについて言えることではありません。他のさまざま兵器（暴力）についても言えることです。

これまでの人類の歴史は、自己の経済欲（衣食住などの物欲）と政治欲（権力欲、優越欲）によって動いてきましたし、今も動いています。それは、強者による略奪・搾取と支配・統治の歴史であつたと言えます。

しかし、今後もこの原理で動いていく限り、人類に明るい未来はありません。釈尊の言われますように、他者（物質を含む）に暴力を振るわず、それらを大切にすることによって、人類の幸せが得られると言えるのです。

後記

一、先日、横浜のある小学校の障害児学級担当の先生から、突然お手紙をいただきました。読んで驚きました。それは、私の出した『人間精神学序説』（風間書房刊）を買って読み、もっと私の考えを知りたいから、文献を送ってほしい、というものでした。

二、この本は、一三三九〇円と高価なのに、一小学校教師が買って読んで下さったことに、まず、驚いたわけです。

三、また、この人は、四人の障害を受けた子どもたちと、八百人の通常の学級の児童との学校ぐるみの交流教育を推進されているようなのですが、その目的は、八百人の子どもたちの人間教育を目指していると書いあったことに、さらに驚いたのです。

四、いま、文部省をはじめ、社会の人も、大学の人も、現場の人も、障害児教育にたずさわる人たちの教育のパラダイム（基本的な考え方）は、「人に好かれる障害児（人の負担にならない障害児）」を育てるといいうものです。私は、そうではなく、障害児教育の目的は「障害児を良く人」を育てることである、と言っているのですが、この先生は、私の障害児教育のパラダイム変革の提案に賛同して下さったようです。私は、こうした先生がたの

増えることを心から願っています。そうやっていくことが、あらゆる人が幸せになっていく道だと信じるからです。

五、あるテレビ番組の「オウム真理教」特集で、ある解説者がオウムは「小乗仏教」で出発したが、途中で「大乘仏教」に変わり、いまは「密教」になっている、と言っていました。その密教は、他者に強制してでも信仰をさせるものだと言解があり、驚きました。まさしく情報公害です。こうしたことがささやかれるのを見ても、私には、オウム事件は、ヨーガにとっても、密教にとっても、とても不幸なことにように思えます。

| | |
|---|--|
| 月刊 こころのとも | 平成七年五月八日 |
| 第六卷 五月号 （通巻 六十五号） | 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 （ひびきのさと 沙門）中塚 善成 <small>（ひびきのさと）</small> |
| 本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660 | |